

おお かじ しち べ え

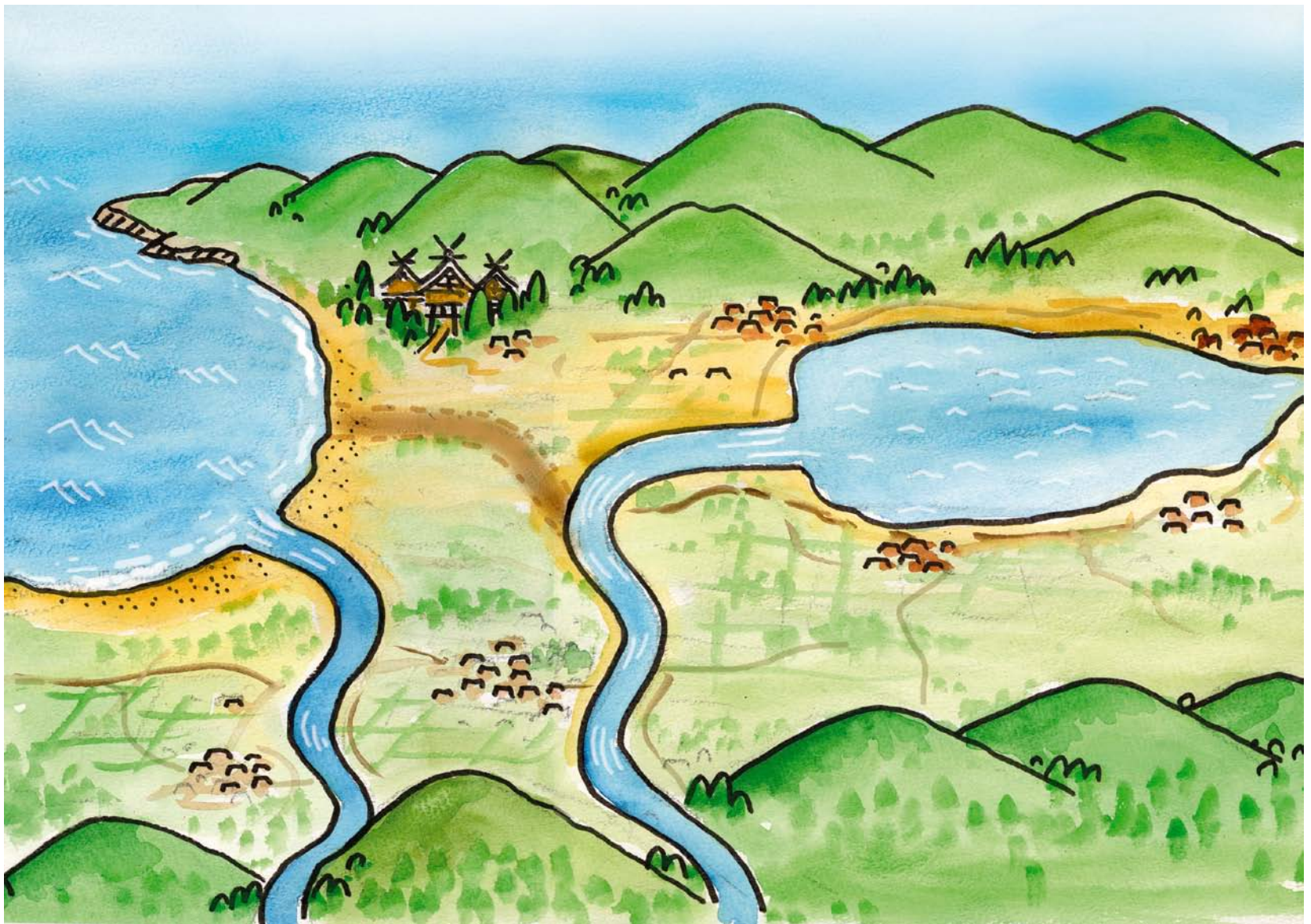
大梶七兵衛

治水の偉人伝





ここは、神話の国出雲。昔々、遠い海の向こうから「国来（くにこー）、国来（くにこー）」と神様が国を引き寄せて出来たと言われています。斐伊川と神戸川の二つの大きな川が流れ、この辺りは大きな入江となっていました。だんだんと山奥から流される土砂によって、次第に陸地が広がっていきました。そして宍道湖と神西湖がある現在の地形が出来上がりました。



二つの大きな川のおかげで、出雲平野と呼ばれる広ーい平野が出来上がりました。しかしこの川は雨が降るたびに氾濫し、農民たちは大変困っておりました。ある年、大雨が降って氾濫した斐伊川は、それまで日本海へと流れていましたが、突然宍道湖へと流れを変えてしまいました。そのため、今までの斐伊川河口付近が広い荒れ地となって残ったのです。



そんなときのことです。出雲の古志というところで庄屋を勤めている七兵衛という男がいました。七兵衛は、この地方の農民が度重なる水害で貧しい生活を送っていることをよく知っておりました。「うーん、なんとしても農地を増やし、少しでも農民に楽な暮らしをさせてやりたいものだ」「そうだ、あの荒木浜一帯の荒れ地を農地として活用しよう」。そう心に決めたのでした。



日本海からは強い風が吹き、一帯は砂で覆われ、野菜は勿論、草木さえも生えない原野が広がっていました。七兵衛は考えました。「まず、この風と飛んでくる砂を防がなければ・・・、よし山を作ろう、そして木を植えるんだ」。それから毎日毎日七兵衛は荒木浜に通い、ソダ垣を作っていました。周囲の人は七兵衛の行動を馬鹿にしておりました。「まったく、毎日ソダ垣ばかり作って何するつもりなんだ」と笑っておりました。



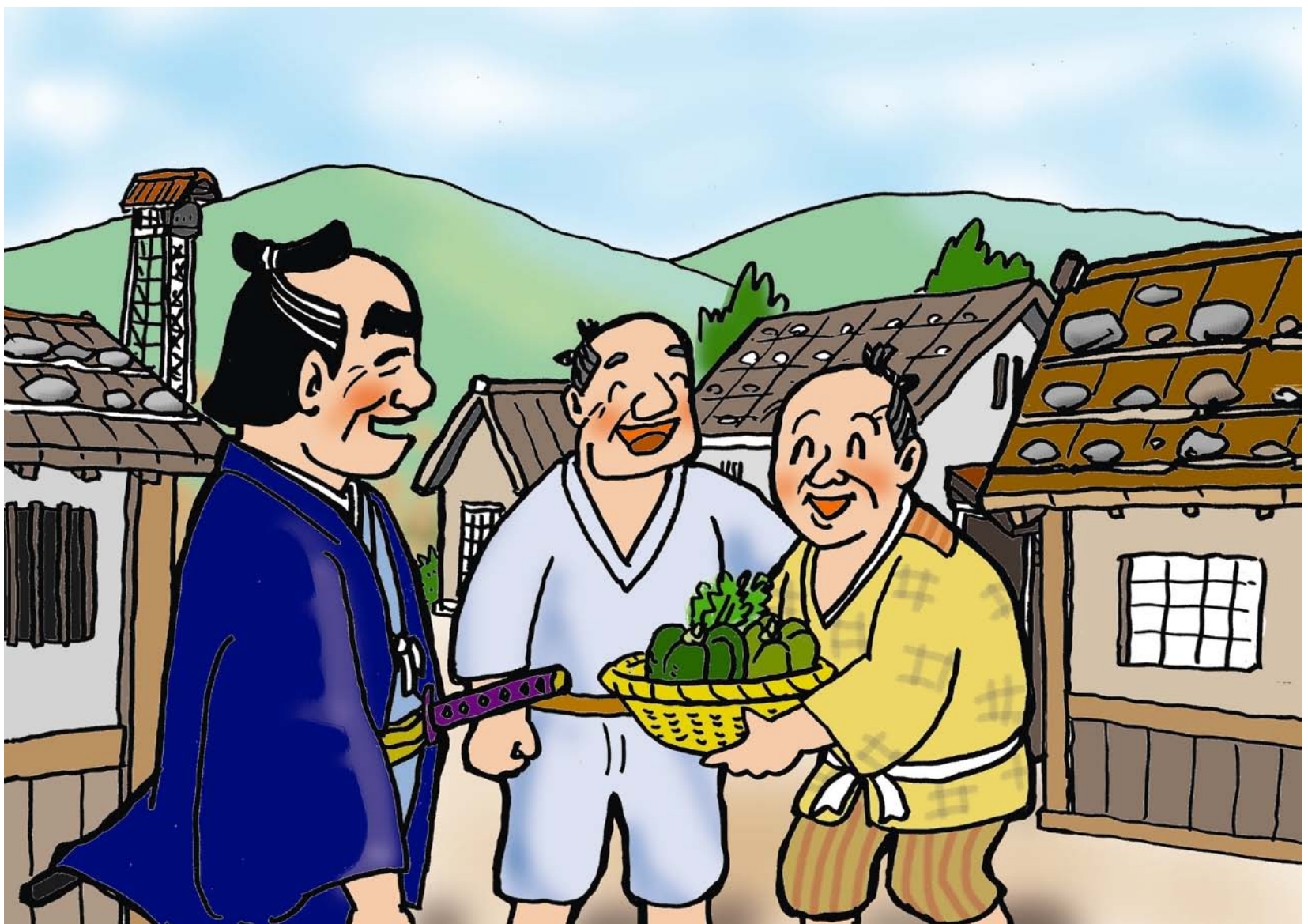
しかし、一筋目のソダ垣が出来あがり、飛んでくる砂がソダ垣に溜まっていき、二筋目のソダ垣を作る頃には周りの人の見る目も変わっていました。「おい見ろ、たいしたもんだ、山ができてきた。七兵衛さんとかいう人だそうだが、たいしたお人じゃ」。こうして三筋、四筋とソダ垣を重ねて行き、とうとう立派な砂山を作り上げました。七兵衛が荒木浜に来るようになってから、三年がたった頃でした。



七兵衛は植林のための松苗を乙立村の知り合いに頼んで育ててもらっていましたが、水の無い砂地でも育つよう、根っこには赤土をたっぷりまぶしたため、大変な重さになり、運ぶ馬や人夫の数も予定より大幅に増えました。その費用などは、みな七兵衛が自分で負担しました。そもそもこの荒木浜の開拓は、松江藩が計画したものの、あまりの難事業のため着手することなく見捨てたものでした。したがって藩からの援助などは一切なく、七兵衛が自分の家財を売るなどして用立てたものでした。



植えられた松も厳しい条件のもとでは枯れる物も多く、その都度苗を補充しなければなりません。しかしそうした苦労も十数年もたった頃、砂山は見事に美しい緑の松林へと変わっていました。植えられた松は南北に八筋に植えられていて、人々はこの山を八通り山と呼び、七兵衛の偉業に尊敬の念を払っていました。七兵衛の家は代々庄屋として裕福ではありましたが家財や田畑を売り払って度重なる出費にあててきました。そうした状況の中でも七兵衛の妻まつは夫の事業の成功に涙し、七兵衛とともに喜んだのでした。



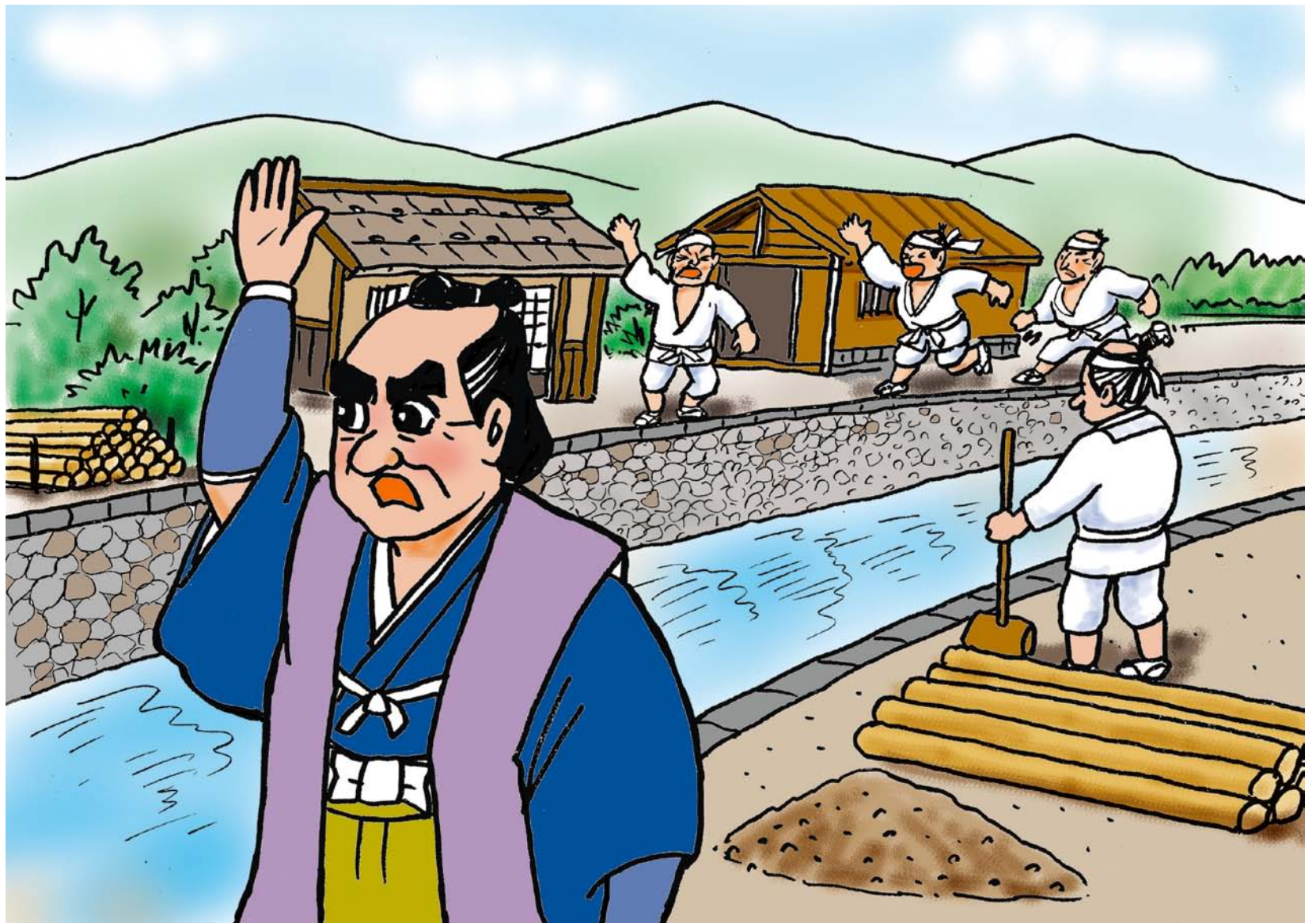
こうして出来た防風林のおかげで、人々が移り住み、新たな居住地が形成されていきました。松江藩も七兵衛の成し遂げた偉業に敬意を払い、「大肝入り」という大変重い役目を与え、この地域一帯を治めるよう命じたのです。湊原新町として誕生したこの地に、広く入植者を受け入れ、神社を造るなどして人々の団結も図っていきました。農作物も次第に増えて来ましたが、どうしても米の出来る土地ではありません。「米が作りたいなあ、水さえあればなあ」七兵衛は、この湊原新町にどうやって水を引けばいいか、毎日毎日そのことばかり考えていました。



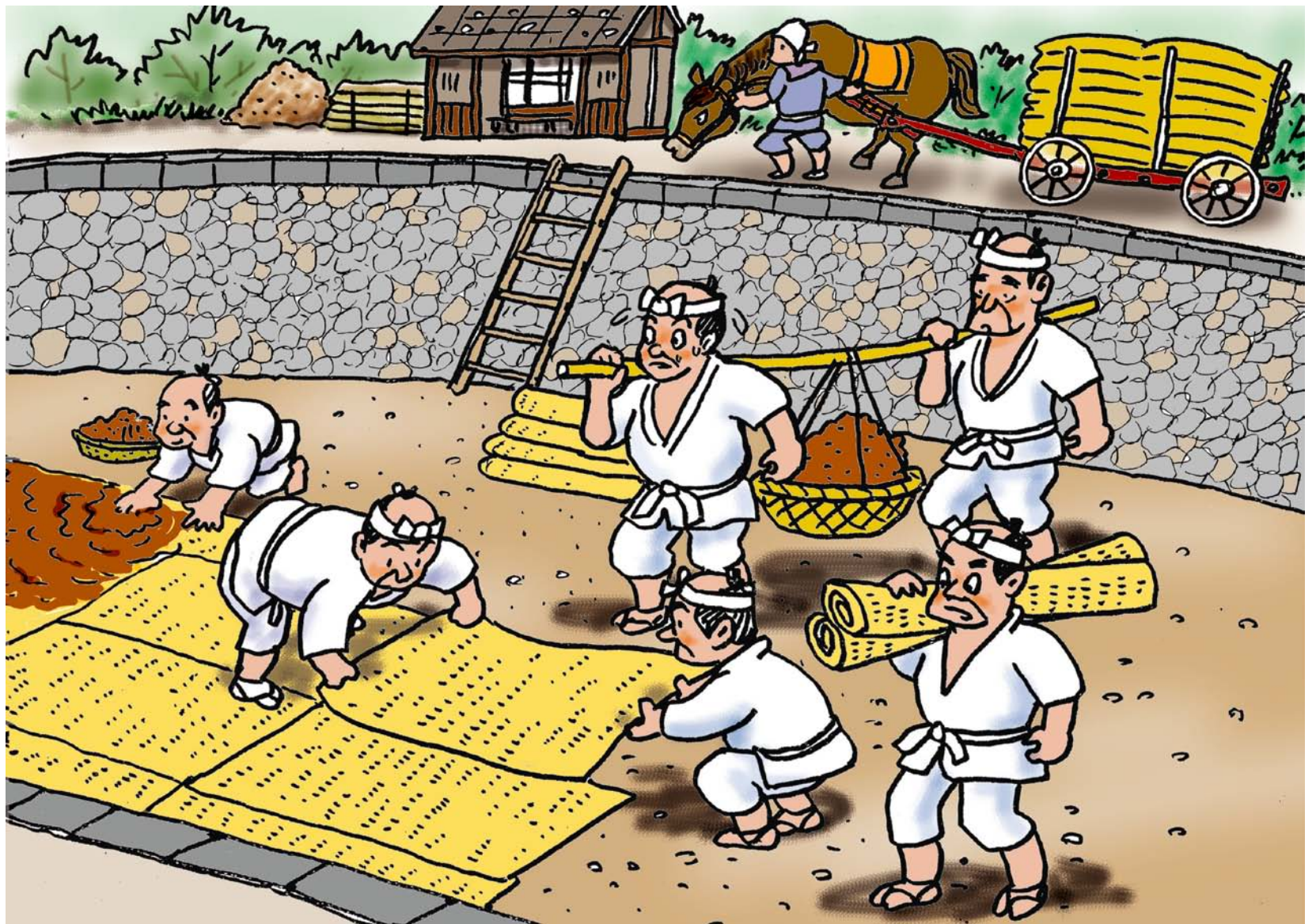
近くには神戸川が流れているものの水位が低く、ここまで流れてくれない。しかし天井川の斐伊川なら可能だ。七兵衛はそう考えておりました。ある日、平田の旅伏山に登り、斐伊川から荒木浜まで見渡せる山頂で思いを巡らせておりました。すると、どんよりと曇っていた空から一筋の陽光がさしてきました。その光は斐伊川から出雲今市の町を通り、荒木浜へと続いていたのです。「おお、ありがたい、やはり私の計画を神様も認めてくださったのだ、有難うございます。」山頂にある神社にお礼を述べ、家に帰ると、一気に図面を書き上げたのでした。



「殿様、斐伊川に水門を設け、水路を造って今市を通り日本海へと流します。奥出雲からの物資も舟で直接日本海へ運べます。農業用水としてだけでなく、交通の便も飛躍的に向上致します」。松江藩も七兵衛の計画を受け入れ、藩の事業として水路の建設を約束したのでした。七兵衛の設計と指導のもとに一大工事が始まりました。まずは斐伊川の水門が完成し、水路は今市の町を抜け、荒木浜へと進んでいきました。



「よーし！水門を開けろ！」七兵衛の号令で斐伊川の水門が開けられました。「どどー！」っと、勢いよく流れる水にみんなの目がくぎづけになりました。しかし、やがて川下にいた人夫たちが大声で走ってきました。「水が流れてこないぞー！」。そうです、勢いよく流れた水も、砂の多い土質の川底に吸い込まれてしまい、遠くまで流れてくれません。「あー！せっかく水路が出来たというのに・・・」。人夫たちからため息が聞こえました。しかし七兵衛はすぐさま大きな声で言いました。



「よーし！みんな、近くの農家からむしろを調達してくるのだ。少々数では間にあわんぞ！」。そして何千枚というむしろが集められました。足りない分は作らせるなどして、どうにか必要な量が揃いました。むしろは川底に敷き詰められ、その上に赤土がべっとりと塗られました。そして再び水門が開かれ、水が流れていきました。七兵衛の考えは見事に的中し、豊かな水量を保ったまま一路荒木浜へと流れていきました。こうした苦難を乗り越えてようやく水路が完成したのです。



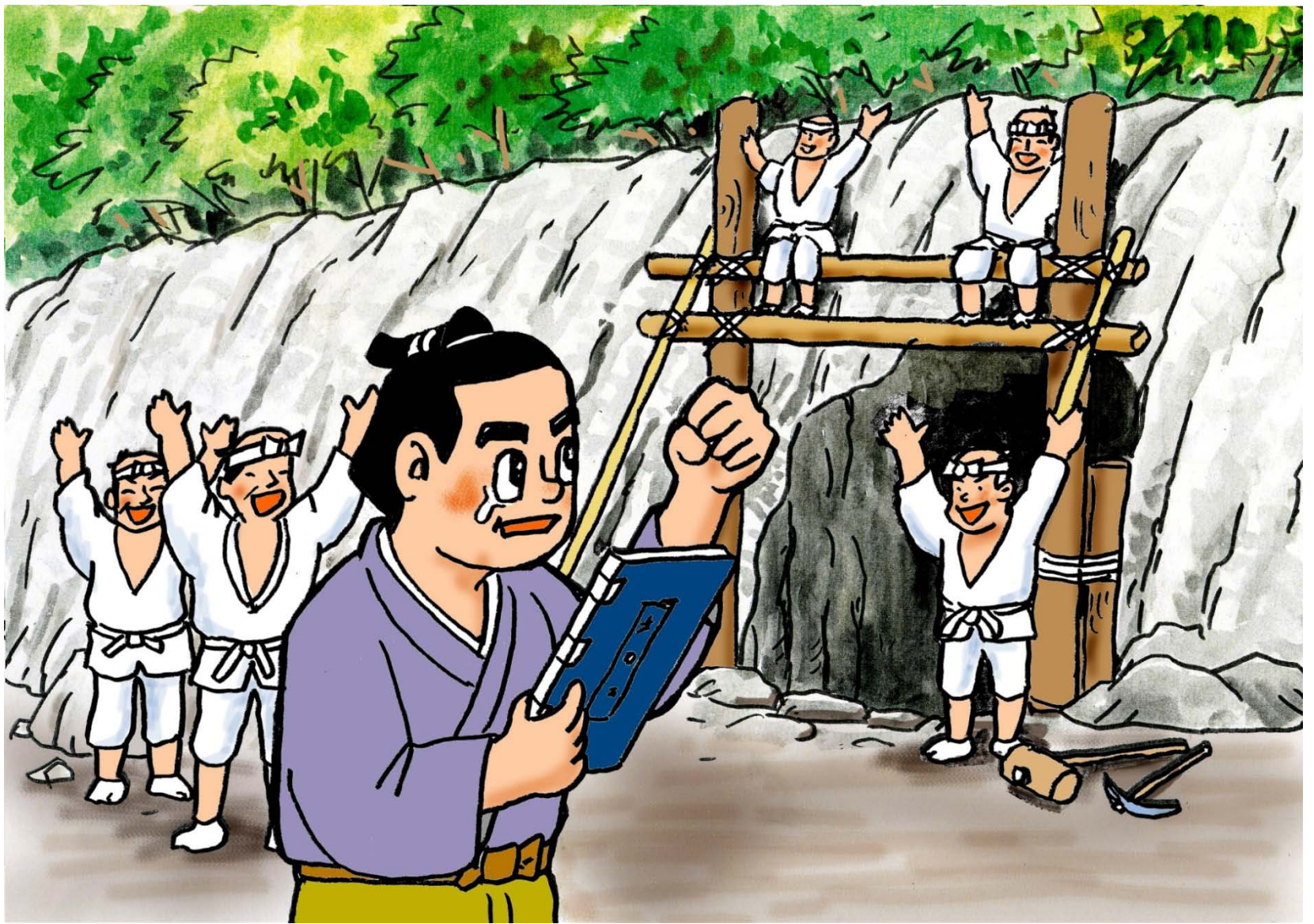
完成した水路は七兵衛の計画通り、物資を運ぶ高瀬舟が行きかいました。このことからこの川を高瀬川と呼ぶようになったのです。荒木浜ではこの水を農業用水として利用し、やっと米作りが出来るようになりました。この地域の人は誰もが七兵衛のことを尊敬し、こう言いました。「屋号が梶で、梶の七兵衛さんだそうだが、梶だけではもったいない。大梶だ、大梶七兵衛さんだ」。こうして七兵衛は大梶七兵衛として農民たちから大変尊敬され、松江藩からも功績として家屋敷を与えられておりました。



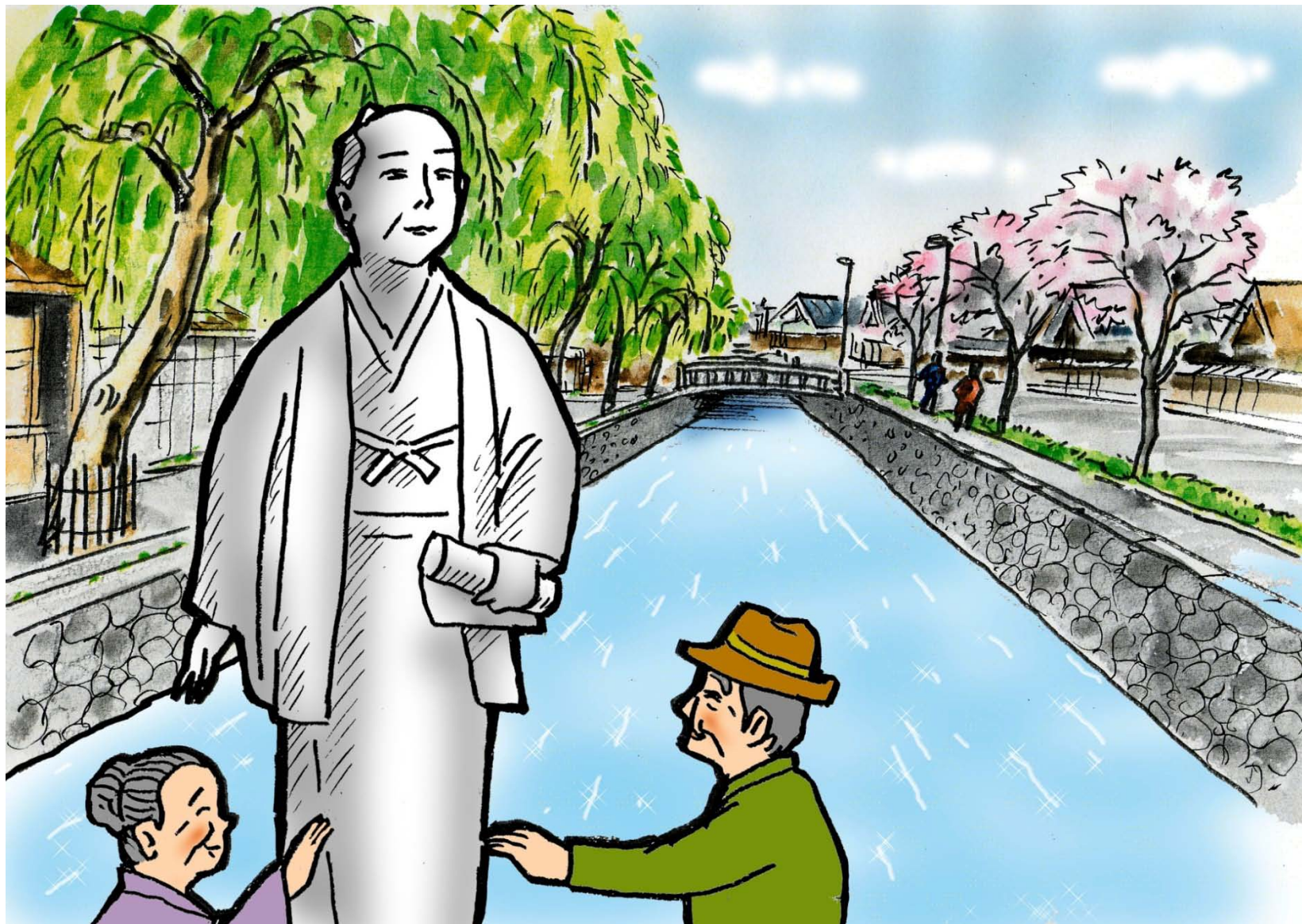
しかし永年の苦勞がたたリ病で床につくことが多くなりました。病床にありながら七兵衛には、気がかりなことがありました。それは斐伊川に設けた高瀬川の水門のことでした。急ごしらえの木製であった為、大きな洪水があるといつ崩壊するかわかりません。すぐ近くにある岩場をくりぬき、岩樋を造る必要があると考え、病氣をおして日夜設計図づくりに励みました。ある日、七兵衛の病状が悪くなりました。妻のまつと長男の朝定が見守る中、書き上げていた設計図を朝定に渡し「よいか朝定、この岩樋が完成するまで私の夢はかなわないのだ、頼んだぞ…」。そう言って大梶七兵衛は六十八歳の生涯を終えたのでした。



父の願いを託された朝定でしたが、ある夜、地域の集会へ出かけたまま帰って来ませんでした。一揆の首謀者と間違えられ殺害されたということです。こんなことがあり大槻家の家屋敷も田畑も松江藩に取り上げられ、残された一家は大変悲惨な暮らしを送るはめになりました。しかし朝定には息子がいました。七兵衛の孫にあたる朝則です。「お父様やお爺様の悲願は、何としても自分の手で成し遂げる」。そう心に決めた朝則は七兵衛の設計した図面を持って松江藩主のもとへ出かけ、岩樋の工事を嘆願しました。かねてから七兵衛の力量を高く評価していた藩は、朝則を指導者として工事を進めることを約束してくれました。



朝則はまだ若干十六歳でしたが、指導者として立派に役を務め、一年後には岩樋が完成しました。七兵衛の設計した岩樋には目を見張る特長がたくさんありました。水位を利用して舟を通す方式は、あのパナマ運河が出来より百八十年も早く七兵衛は取り入れていたのです。それ以来、高瀬川にはいつも豊かな水が流れ、水の流れを利用した水車での製粉業なども盛んになり、名物出雲そばも有名になりました。



三百年以上がたつたいまでは、青々とした八通り山のふもとに豊かな農地が広がり、様々な農作物が作られています。大梶七兵衛の銅像は八通り山のふもとと、にぎわいを見せる今市の三京橋の二箇所建てられており、清らかな流れを見つめています。今の出雲地方の繁栄は、こうした偉大な先祖の苦勞のおかげなのです。出雲の人々は皆、大梶七兵衛さんの前に立つとこう言います。「七兵衛さん、だんだん、だんだん」。